



No. 80 2006. 3
 (株)よかネット

NETWORK

農家も住民も喜び、地域にもプラスになる
 コーポラティブファーム「さくらガーデン」の取り組み 2
 田園楽住の会活動報告

“農ある暮らし”の住宅プロジェクト視察 4

稲築町、住民と行政との協働の花壇が
 「福岡県造園業協会会長賞」を受賞
 ～これまでの手づくりでの施工と管理が評価される～ 5

佐賀県に日本で初めての自治体設置による
 シンクロトン光施設がオープン 6

第3回・第4回 景観なんでも交流サロン活動報告 8

見・聞・食

熊本の中心市街地に「まちなか工房」が出来た 8

街なかのコミュニティを考えた 9

地域計画のための一知半解事典
 どうしてBB世代の持家世帯は増加している？ 10

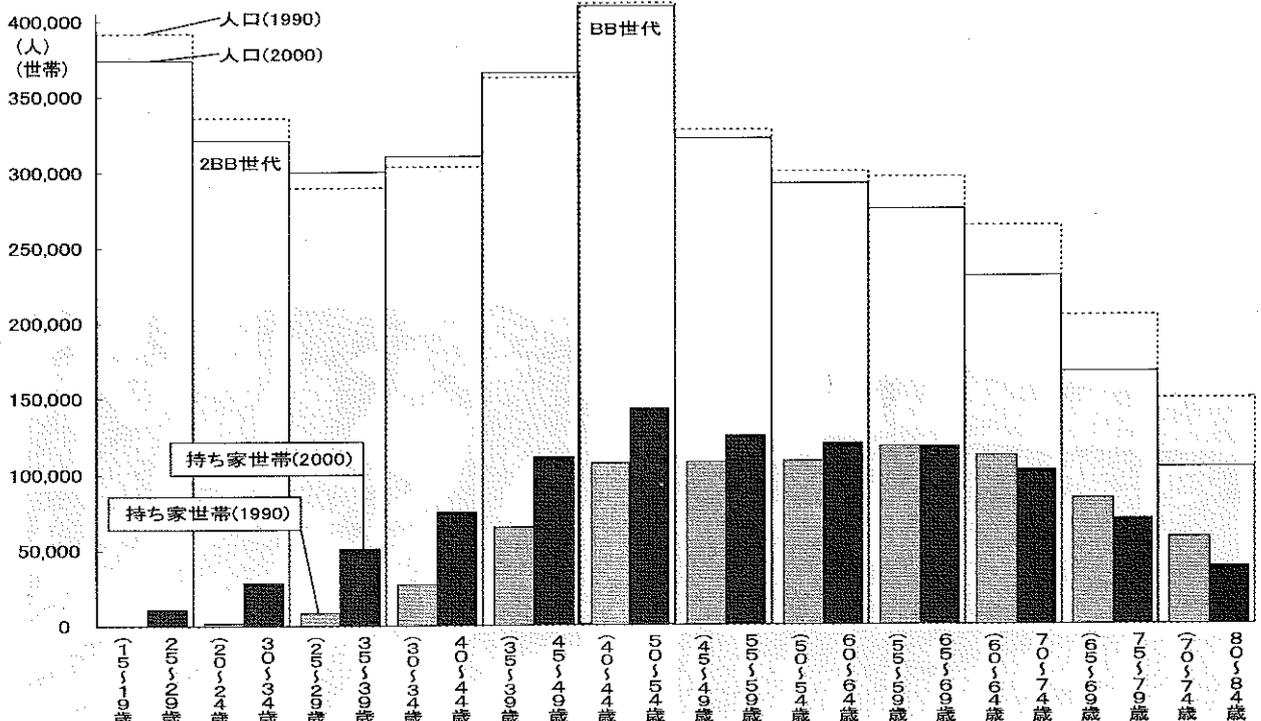
近 況

パソコン再生奮闘記 11

お知らせ 12

●BB（ベビーブーム）世代が未だに住宅需要を牽引している？

福岡県の住宅需要は1990年から2000年の間にどのように変わってきたのか、世代別の人口と持家世帯数のコーホート推移から見てみました。福岡県全体の持家世帯は150千世帯（866→1,016千世帯）増加していますが、35～49歳持家需要層だけでなく、BB世代でも約35千世帯（107→143千世帯）も増加しています。この10年間の住宅需要にも、BB世代はかなり貢献しているようです。（関連記事10頁へ）



資料：国勢調査

農家も住民も喜び、地域にもプラスになる コーポラティブファーム「さくらガーデン」の取り組み

田園楽住の会活動報告

本田 正明、山田 龍雄

「賃貸に住む彼は、年100日ぐらいしかこっちに居ませんが、ここを実家だと思ってますよ」という久野さんの言葉を聞き、さくらガーデンにはいいコミュニティがあるのだなと思った。と同時に、自分は“田園楽住”に農業ができる環境よりもコミュニティを求めているということに気づかされた一瞬でもあった。

さくらガーデンは、横浜市郊外に“農ある暮らしを楽しもう”と考える人たちが住むコーポラティブハウスだ。田園楽住の会では、今回、実際の事業の取り組みを見ようと、横浜の現地まで見学に行った。冒頭のセリフは、話を伺った住民の方の一言だ。

さくらガーデンは約1,000㎡の敷地に100年のもつという鉄筋コンクリート2階建ての住宅が農園を取り囲むように3棟建っている。住民は30歳代から60歳代までいて、新婚夫婦、小学生のいる家族、単身のビジネスマンや女性、リタイヤした夫婦など、実に多様な人たちが集まっている。久野さんはその中で一番の年配者だ。

現地集合だったにも関わらず、関心を持つ人が多かったようで、福岡だけでなく東京、静岡からもメンバーが集まり、10人ほどで押しかけることになった。事業を計画した集住体研究会の橋本さん、原さんも来てくれて、一緒に話を伺った。



住宅と農園が一体になっている

事業リスクを誰が負うのか？

「そもそものきっかけは、農地を守りながら農家が安定的な生活をできるようにしたいという思いからです。それと社会資本となる建物も残したいという思いがありました」と橋本さんが話を始めてくれた。農園をシェアしたり、コーポラティブで集合住宅を建てたり、定期借地権を活用するなど、今までにあまり例のない住宅づくりなので、市場性もわからないのに一体誰が事業のリスクを取ったのだろう？というのが、非常に大きな関心事だった。

参加メンバーの一人が、単刀直入に「誰がこの事業のリスクを負ったんですか？」と聞いたところ、「事業主体は、農家をしている地主さんなのですが、事業のリスク管理や資金計画などプロジェクトのマネジメント知識のある人が別途に必要になります。この事業では私がマネージャーをしたのですが、地主と住民の交渉の仲介から、事業の収支やキャッシュフローを常に考えたりと、実にたくさん仕事があります。当時は定期借地権が担保物件にならずに、金融機関の融資がなかなか得られなくて、かなり苦労しました。実は賃貸棟を入れたのも分譲棟のリスクヘッジのためなんです」と答えてくれた。

話を聞いていると、ほとんど橋本さんがリス



久野さんの自宅で話をうかがう



子供たちも一緒に収穫祭を楽しみます

クを取っているのではないかと思うのだが、久野さんが「実は橋本さんは、地主の息子さんなんです」と教えてくれたので、ようやく納得がいった。

ただ、地主とマネージャーの仕事を一体視されたためか、今回はマネージャーの費用は事業費に入っていないそうである。事業主体とマネージャーがまったく異なる場合には、マネージャーの費用をどこから捻出するかを考えないといけない。

コミュニティづくりにはコーディネーターが欠かせない

さくらガーデンのプロジェクトでは、事業のマネージャーとは別途に入居者の募集から住民のコミュニティづくりなどを行ったコーディネーターが存在する。原さんがその役割を担っているのだが、「コミュニティをつくるには、同じ価値観をもつ人たちが集まる仕組みが必要です。農にしても本格的な農を目指す人の集まりなのか、楽しむ程度の集まりなのかを考えていないと。建築系の情報誌などでのPRもかなりのムダ打ちが必要でした」とのこと。事業の経緯を改めてみると、居住者募集の説明会を7ヶ月間に渡り9回も開催している。マーケットの絞り込みやコミュニティの距離感なども考えたりと、コーディネーターの仕事も奥が深い。

話を聞くまでは、事業マネージャーとコミュニティづくりのコーディネーターの仕事を分けずに考えていたのだが、兼任できる人は相当の経験を積んでないと難しそうである。ちなみに、コーディネーターの費用はちゃんと事業費に入っているそうだ。

「コミュニティにもコーディネーターの“色”が出るね。原さんはアバウトなところがあるから、それを許容できる人たちが残ったんじゃないかな」と、久野さんが言ったのだが、確かにコーディネーターの人柄も計画の大きな要素になるのかもしれない。



農園で収穫されたさつまいも料理でおもてなしを受けた

また、逆に原さんは「久野さんは、第1回の居住者募集の説明会から参加してくれていて、住民側の代表的な存在になってくれていたので、非常に助かりました」というように、コーディネーターだけでなく、住民側にもキーマンがいたわけである。

田園居住のニーズも世代で違う

見学した日は、たまたま秋の収穫祭だったので、話を聞いた後は、住民のみなさんに混じって、パーティに参加させてもらった。農園で取れたものをベースに、青菜の和え物から野菜たっぷりのポトフ、野いちごなど、いろいろなものが食卓に並ぶ。近くの農家や住民の友人からの差し入れがあるなど、周りとのコミュニケーションも広がっているようだ。

私と同世代ぐらいの賃貸居住の人は、「人数が増えたからパスタをつくらうかな」と思ったかと思うと、いつのまにか本当に料理してもってきていた。農園付きの環境を求めるだけあって、料理好きな人も多いようだ。

実際に様子を見てみると、冒頭に書いたようにコミュニティが一番大切なものではないかと改めて思うのだが、一緒に来ていた私の両親にそのことをいうと、「自分たちの求める田園居住はちょっと違うかも。住宅はやっぱり別々がいいし、農園は小さくても構わないから、病院と交通の便がいいところに住みたい」という答えが返ってきた。また、コミュニティにもそれほど関心がないようだった。それは親戚付き合いなどがわずらわしく

て都市に出てきたBB世代だからなのか、よくわからないが、とにかく“田園居住”という言葉の捉え方は人や世代によっても、ずいぶん違うということに気づかされた。

(ほんだ まさあき)

“農ある暮らし”の 住宅プロジェクト視察

都市郊外部の遊休農地は、“農ある暮らし”を求めたい都市住民にとっては有効な社会ストックであるが、今は遊休農地を十分に活かしてきていない。福岡市の郊外部では田園地帯に、既存集落とは無関係に開発された小規模な住宅団地が点々とみられる。どうみても20年後は中古住宅としても売れず、空き家化し、ますます田園風景を壊していくような風景となってしまうことが容易に想像される。

このような問題については、当社の系乗が10数年前から“田園楽住”構想で提唱している農地は農地のままで、家を建てる分だけ宅地化するというコンセプトは、遊休農地を無駄にせず、子供たちが減っている集落維持にも有効な手段であると思う。

現在、福岡都市圏の郊外部にある地域の土地利用構想を地元の方々と一緒に検討しているが、地元の人たちから遊休農地が年々増え、荒廃しているという事情を聞くにつれ、一層遊休農地について考えさせられている。

周辺の住宅地に、ほどよく馴染んだ風景となっている

さくらガーデンは、横浜市の町部から電車で40分ほどいった郊外部の終点駅、下飯田駅から歩いて10分ほどの丘陵地にある。現地を見るまでは、田園地帯に少しは囲まれた中にあるのではないかと勝手に想像していた。しかし、この地区一帯は市街化調整区域であるものの、集落内には結構アパートも建てられており、既存宅地制度などを活用したのであろうか、かなり住宅地に変わってきているようなところであった。

建物は2階建てで、分譲棟2棟(4戸)、賃貸棟1棟(4戸)の計8戸がコの字型に分譲居住者用の畑を囲んでいる。

何も知らなければ、単に農村の集落内に少しおしゃれなアパートが建っているくらい感じで通り過ぎるのではないかと、思うくらい周辺の住宅地となじんでいる。

また、この敷地の南側の一部の農地(雑種地)を、オーナーが入居者に無償で貸し出している。現地をみると、特に目印があるわけでもなく、どこからが宅地でどこからが農地であるのかわからない。ここでは近所の農家の方が農作業を教えてくれるようになってきているらしい。

そこそこ“緩やかな”コミュニティがよい

このプロジェクトで主に住民のコーディネーターをつとめた原さんにお聞きすると、「最初は畑の使い方も細かいルールを決める予定であったが、居住者も7世帯だけなので馴染まないのではないかと思った。今ではルールは決めず、お互い迷惑をかけない範囲で畑仕事をするということでおさまっている。あまり干渉しない、緩やかなコミュニティがよいみたい」というようなことをおっしゃられた。やはりコーポラティブ型といってもほどよい距離感での付き合いが必要のようだ。

視察の日は、たまたまさくらガーデンの収穫祭の日であった。この収穫祭は、入居者の方々の持ち寄りパーティで、私たちも参加させていただき、お酒を飲みながら気楽に入居者の方と話をさせていただいた。

賃貸棟の入居者の中には月の半分以上は九州方面に出張がある30歳代の独身の人も手づくり料理

プロジェクト概要

場所：神奈川県横浜市泉区和泉町
横浜駅より地下鉄で40分 + 徒歩10分程度
土地面積：住宅および農園 約1,090㎡
隣接した農地(雑種地)約500㎡を借地利用
計画地域：市街化調整区域(宅地確認済)
形態規制：建ぺい率50%、容積率80%
住宅形式：RC構造2階建て
戸数：8戸(賃貸4戸、分譲4戸)
住宅面積：分譲約80㎡、賃貸約45㎡
供給方法：賃貸方式及び建物譲渡特約付き定期借地権分譲

を持って参加されていたが、「ここが自分にとっては実家である」と言っていたのは少し驚かされた。さくらガーデンにはそう感じさせる魅力があるようだ。(やまだ たつお)

稲築町、住民と行政との協働の花壇が
「福岡県造園業協会会長賞」を受賞

～これまでの手づくりでの
施工と管理が評価される～

山田 龍雄

“住民と行政との協働のまちづくり”のきっかけとして、シンボルづくりの取り組みとして実施した稲築公園拡張に伴う花壇・日時計づくりが完成して、早2年を経過しようとしている(作成までの経過についてはよかネット69号に掲載)。

昨年の11月には、この手づくり花壇が「平成17年度花と緑のふくおか県コンテスト」において「(社)福岡県造園業協会会長賞」を受賞した。私も2年前、寒い中で住民や行政の方々と一緒に作業をしたので、受賞の報を聞いたときには、当時のことを思い出し、うれしく思った。

1月15日には、今年最初の花壇の手入れも兼ねて懇親会も催された。私も懇親会で出される豚汁に誘われて久しぶりに参加すると、下は小学低学年の子供たちから、上は70歳を超えているであろう元気な高齢者の方も含めて、50人近くが参加されていた。

この花壇の管理が、住民と行政との協働の精神で引き継がれていることに対して、「元気にさかせ隊」の方々に敬服するとともに、今までの管理の状況について、一度整理しておく必要があると思ひ、明石会長に話を伺った。

定例日には、常時30～50人が参加

現在、「元気にさかせ隊」のメンバーは150名である。花壇管理の定例日は、一応、毎月の第1日曜日と第3木曜日の月2回となっている。しかし、第3木曜日は花の植替えや夏場の草取りなど、必要な時にだけ呼びかけているらしい。今では、事前に各花壇(スロープ沿いに6つの花壇)メンバーの主な人にだけ定例日の案内を出しており、この方法でだいたい30～50人の参加がある。

各花壇の管理の担当は、2年前に花壇のデザイ

ンを考えるワークショップの時に、たまたま花壇毎にグループ分けした人たちが、そのまま施工を担当し、さらに管理まで引き継いでいるようだ。やはり自分がデザイン・施工まで係わった花壇には愛着を抱くものである。私もたまに定例日に行くと、一番係わった花壇がなんとなく気に掛かる。

明石さんも「参加は無理しない範囲でしていただいており、自由にしているが、その分、各参加者は、責任を感じて行っているようだ。良い意味で他の花壇との競争心が出てきているのかも知れない」と言われており、今は『隣が頑張れば自分のところだけは怠けられない』といった相乗効果が生まれているようだ。

苗から花を育て、町に広める取り組みをしたい

現在、各花壇内には多年系の草花も植えられているが、年間2～3回、時期に応じて花の植替えを行っている。その草花の調達は、ガーデニング用品や草花を取り扱っている店から購入している。その購入費のほとんどは、町の助成金から賄っている。ちなみに会費は年間500円であり、会費のほとんどは通信費でなくなってしまう。

明石さんは「せっかく花が好きな人の集まりであり、助成金を有効に使っていくためにも単にお店で購入するのではなく、苗から花を育てていかなければいけない。また、この苗を他に手づくり花壇を行っているようなグループにも配ってあげるようなことをして、ネットワークをつくっていくこともしていきたい」とおっしゃった。

実際、「元気にさかせ隊」では、メンバーの方の勉強と会員を増やすことを目的に、年2回の「花植えの勉強会」や「視察会」を実施してきた。

これまでメンバーの方々が行ってきた経験や知



花壇の入り口近くにある参加募集の手づくり看板



来年は、この柵一面にバラが咲き、バラの通路となる

識を活かしていくためにも、明石さんが言われているように町内の遊休農地を借りての“自前の苗づくり”が、今後の大きな目標のようだ。

また、「公園や花づくりに係わっている方たちとのネットワークや情報が大切である。例えば、あそこに行くと安く良い苗が手に入る、あそこには花壇の縁になるコンクリートのテストピースがある、などの情報があると非常に助かる。これまで(NPO)福岡ランドワークからの情報で、粕屋町にある福岡魁成高校から苗を無料で提供していただいた」。これも実際に、管理に携わってくる中からしか出てこない話であり、同じような活動をしている人たちの横のつながりの大切さがわかる。

徐々に花壇もグレードアップ

今回、久しぶりに管理のお手伝いに行って、驚いたのは、公園入り口から20～30m上部にある芝生広場へのスロープの中央部に、バラ柵を準備されていたことである。

これは2年前、どんなイメージの公園にするかで話し合いをしていたときに、出てきた意見を採用し、最初のイメージ図に描いたものであった。施行当初のときには、予算がなくて実現しなかったものである。私も、実際に取り付けているバラ柵を見るまでは当初のイメージ図を忘れていたのだが、2年目にちゃんと実現されているのである。バラが柵一面を取り囲むぐらい咲く頃には、公園の眺めも一層華やかになることと思われる。

また、この公園は飯塚から嘉穂町方面へ抜ける国道211号沿いにあるのだが、国道から一番眺められる斜面地には「いなつき」という文字をサツキの樹で形づくっている。これも最初のイメージ



合併でなくなってしまう「いなつき」を斜面にサツキの樹で形づくる

図に描いたものである。このようにこの花壇は、最初のイメージを大切に、年月かけてグレードアップしている。

今年の3月27日から山田市、稲築町、碓井町、嘉穂町の1市3町が合併し、「嘉麻市（かまし）」となる。嘉麻市となっても、この手づくり公園の取り組みの志しと経験が、他市町にも伝わり、この輪が広がっていくことを期待したい。

（やまだ たつお）

佐賀県に日本で初めての自治体設置による
シンクロトン光施設がオープン

山辺 眞一

2月17日、佐賀県鳥栖市のジャンクション近くにある鳥栖北部丘陵新都市の中に、佐賀県立九州シンクロトン光研究センターがオープンした。

このプロジェクトは、平成9年に策定された佐賀県科学技術振興ビジョンで提



施設の位置図

言されたもので、当社との関わりは、研究施設の利用促進に向けた業務を受託した時からである。プロジェクトが開始されて約10年の時が経ったが、この間ずっと施設の利用促進のために行ってきたいろいろな活動が思い出される。



兵庫県西播磨のSPring-8(HPより)

世界トップの放射光施設は、SPring-8

シンクロトロン光は通常の光に比べて極めて明るく、エックス線から赤外線まで幅広い波長の光を取り出すことができる。国内で最も有名なのは兵庫県の西播磨に設置されたSPring-8である。この施設は国家プロジェクトとして、約1100億円の建設投資によって設置されたものであるが、世界一のシンクロトロン光施設として稼働している。

何が世界一かというと、光を発生するための電子エネルギーを蓄積する力が、8GeV（ギガ電子ボルト）であり、アメリカやヨーロッパにある類似施設のエネルギーよりも大きいことからそう言われている。

SPring-8の蓄積リングの周長（写真中央の輪になっている部分の内側に電子が走るリングが設置されている）は約1.4kmあり、巨大な施設である。ここでは国内外の大学等研究者、企業研究者、施設関係者を含めて、常時約1200人の人々が従事していると言われている。

規模は小さいが

佐賀県の今回の施設は、直径約24m、周長75.6mの円形の蓄積リングではあるが、エネルギーは1.4GeVを達成している。特徴的なのは、自治体が初めて設置した放射光施設であるという点だ。そのため、地域振興、すなわち地域の産業振興への期待が大きく、県内だけではなく、九州、アジアを含めた拠点機能への発展が期待されている。

これまで実施してきた利用促進のための企業調査等では、国内放射光施設の最西端は広島大学にある施設で、九州からもそう遠くはない所にあるが、大学の施設ということもあり、一般にはあまり知られていない。もともと九州では、シンクロ



佐賀県立九州シンクロトロン光研究センター正面入り口から見る



実験フロアー内部、コンクリートで遮蔽された蓄積リングから手前に伸びているのがビームライン(HPより)

トロン光とあまり馴染みがなく、大企業などの大きな研究開発部署を持つところ以外の企業においても、調査を開始した頃はシンクロトロン光という言葉自体の認知度もそれほど高くなかった。

しかし、地域の大学の中には、シンクロトロン光を利用した研究を行っている研究者もおられ、この研究者グループを核とした分野別の研究会活動によって企業を巻き込んでいく方法や、県民向けのシンクロトロン光の紹介などによって地域全体の認知度を高めていくこと等、施設計画と並行して情報発信活動が進められてきた。和歌山のヒ素事件で使われたヒ素の産地分析でSPring-8を使って分析が行われたという報道で全国的にもシンクロトロン光の知名度が上がったように、この施設で早く利用の成果が出てくることによって、九州の放射光施設の存在を広く認知してもらうことが期待される。

九州縦貫道、横断道の交差する鳥栖ジャンクションに近接するという九州域内からのアクセスの良さ、また、西に佐賀空港、北に福岡空港という

九州外からのアクセスの良さ、これらの立地条件を生かしながら、“ユーザーフレンドリー”な利用サービスやスペースの提供を進めていくことによって、大学、企業の広範な利用が期待される。

既に4本のピームラインも設置されており、施設の見学も、事前に申し込みは必要だが、可能である。鳥栖付近を通る際に、シンクロトロン光という最先端の科学技術の現場を見て、実感されることをお奨めしたい。（やまべ しんいち）

第3回・第4回
景観なんでも交流サロン活動報告

本田 正明

昨年の6月頃からサロンの活動を始めて、半年あまり経ったわけですが、事務局のメンバーも4人に増え、景観をテーマとしたゼミの講師に呼ばれるなど、なんとなく会らしくなってきました。ずいぶんと報告を怠っていましたので、11月17日に行った第3回、2月8日に行った第4回のサロンの様子を合わせて報告します。

第3回「柳川堀割再生の取り組み」

堀割再生の先導的な役割を果たしてきた故広松伝氏の最後の講演ビデオを見たあと、柳川「水の会」の事務局長をしている松石さんに、現在の柳川の状況などを説明してもらいました。

今まで、広松さんが行った取り組みと市民の堀割清掃活動しか知らなかったのですが、建設省（現国土交通省）が決定していた堀割の埋め立て計画を覆しても、堀割再生を支持した当時の古賀市長のことを、恥ずかしながら今頃教えてもらった次第です。現在は、街なかに若い人があまりおらず、堀割掃除に参加する人たちも高齢化して参加が減っているなど活動の継続にはいろいろ問題もあるようです。また、これまでは手すりやガードレールのない昔ながらの景観が維持されてきた場所に、自動車が堀に落ちたり、児童の通行に危険だからという理由で、手すりやガードレールが設置されたりしているそうです。“景観”と“安全”のどちらを優先するかと言われると難しい問題ですが、“水の郷”と言われているのに、なんとなく対応が場当たりの気がして、地元の人たちは柳川の将来像をどういふふうと考えているのだろうか、ととても気になりました。

第4回「色とまちづくり」

イゴス環境・色彩研究所の山口さんに、これまで関わってきたまちづくりと色をテーマにした話をしてもらいました。山口さんは、協同組合「地域づくり九州」のメンバーでもあるので、よくお会いする機会があるのですが、仕事の話をも具体的に聞くのは初めてで、親父さんの営むお店を“色”を使ってなんとか繁盛させられないかと考えていたのが、原点だとは全く知りませんでした。

その後、メイク インテリア エクステリア 道路 街の景観というように活動の分野を広げていったそうなのですが、街でふとあるモノを見て「どうして色や形がちぐはぐなのだろう」といった素朴な疑問を放置せずに、なんとか良くしようと積極的に行動を起こしています。「仕事は待っていてもこないで、リスクをとってでも作らないといけない」というのは、見習わないといけない姿勢です。

仕事論の話で盛り上がりすぎてしまい、肝心の“色”についてあまり話が聞けなかったので、機会を改めてセッティングすることにしました。

今回は街を歩きながら福岡の景観を考える

今年最初の企画会議で、会議室で行うサロンだけでなく、実際の景観を見て回りながら、みんなの意見を交わす場もつくろうということになったので、今回は「福岡のまちの記憶と景観・失われた景観を巡る」と題して、福岡の街なかを歩く会をしたいと思っています。暖かくなった春先の4月頃の開催を考えておりますので、参加を希望される方は、「案内送れ」とご一報ください。

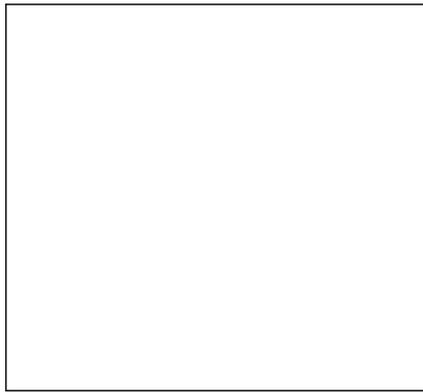
（ほんだ まさあき）

熊本の中心市街地に
「まちなか工房」が出来た

原 啓介

昨年、熊本大学工学部がまちなかへ「出張所」を出したという噂を聞いた。いつか見に行きたいと思っていたが、2月上旬に熊本に行く機会があったので遊びに行った。

この出張所は、「まちなか工房」という名前である。まちなか工房のセンター長で、熊本大学工学部都市計画専攻の両角先生（私の先生であった）に話を聞いた。



熊本市内でも若者が多い並木坂という地区にオープンした

まちなか工房の概要

設立までの流れは、文部科学省の特別教育研究費の採択を受け（平成17～21年度）、「ものづくり創造融合工学教育事業」に着手した。知的なものづくりを实践する場が必要ということで、学内と学外に工房を整備することとなり、学内に「ものくり工房」学外に「まちなか工房」がつくられた。（ものくり工房...コンピューター制御や手動操作の各種機器を装備し、短時間に模型や実物を試作する研究、授業、実験の場。）

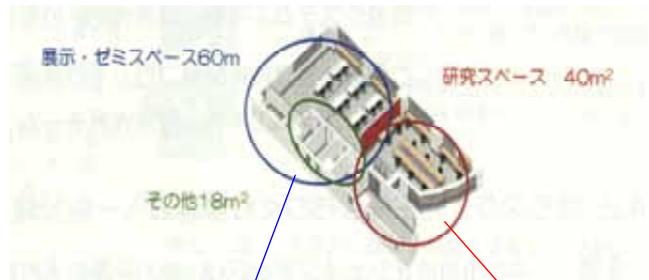
まちなか工房は平成17年5月にオープンし、平成18年1月末までの利用者数は延べ約2,400人とのこと。

大学と地元が連携したまちづくりの拠点となっている

まちなか工房では、地元商店街の方や地元企業、行政、専門家等が集まって、月に一回“まちづくり学習会”を開催しており、この学習会では、中心市街地の現状、課題分析、郊外の大型ショッピングセンター進出の影響調査、まちなかの交通計画、城下町の比較など、まちづくりに関係したテーマを討論しているようだ。また、今後は中心市街地の課題・魅力を整理し、まちづくりの将来像を描いていくということである。

まちなか工房は、まちづくりの技術を学習し研究する場だけでなく、地域と一緒にまちづくりの将来像を描き、その実現に向けて実践する活動拠点になっている。また、工学部各学科の研究成果をまちを訪れる人々に紹介したり、まちを訪れる人々が建物の模型やパースに触れることができるなど、大学・住民・企業・行政がともに研究・学習をしながら情報交換の場となっている。

普通、市役所や研究室はやはりどこか近寄りがたい雰囲気があるが、まちなか工房は、熊本の中心市街地の中でも若者が多く、洒落た店舗が多い



面積は120㎡、研究スペースと展示・ゼミスペースがある内装は白で統一、椅子などのインテリアもオシャレ

通りにある。通り沿いはガラス張りで、内装もセンスの良いインテリアでまとめられていて、覗いてみたくなるような雰囲気である。個人的には、まちづくりに興味がある人でも、そうでなくても、まちで何かおもしろいことが起きていないか、ちょっと様子を見に行ってみたくなるような“遊び場”になればいいなと感じた。

（はら けいすけ）

街なかのコミュニティを考えた

雪丸 久徳

私が住んでいるまちは、天神や職場のある中洲まで自転車で10～15分の位置にある。歩いて暮らせる範囲内にスーパー、飲み屋などがあり、生活に必要なものは大体なんでも揃っている。一方で生活していて不安なことも多少ある。例えば、地域内でひったくり等の犯罪が多く起こっているようで、マンションには注意を促す張り紙が貼られている。ちなみに私も、引越の荷物を搬入している途中に一箱奪われた。

今年の4月で福岡の都心に移り住んで2年近くになるが、自分の住んでいるまちの町内会や地域の活動の実態については何も知らなかったので、校区の公民館に話を聞きに行ってきた。

今住んでいる白金2丁目は福岡市中央区の「高宮」という校区にある。校区の人口は10,100人、世帯数が6,500世帯、一世帯当たりの人口1.54人（平成17年9月末現在）。これは福岡市内でも7番目に低い。言わば1人暮らし世帯の割合が高

い校区である。

公民館主事の話によると、月に約1、2回のペースで「子ども広場」（小学生を対象とした料理教室など）や「高齢者教室」（学習会）が行われている。意外にも、その他に文化・スポーツ系のグループやサークルが約30もあるそうだ。しかも、そのグループ活動の公民館利用頻度があまりに高くなったため、部屋の使用は月に3回までと制限を設けたそうだ。さらに、10年以上前から続くサークルが10以上あることにも、驚いた。ただ、新しく入ってくる人は少なく、活動参加者は高齢化がすすんでいるとのこと。サークル自体はオープンに人を募っているそうだが、賃貸マンション等に住んでいる若い世帯の人たちの参加は、ほとんどないと言っていた。私もその時初めて知ったくらいなので、納得できた。

賃貸ワンルームに住む私にとって、今の住まいは、寝るだけの「ねぐら」と化している。夜間市民といっても過言ではない。町内会はもちろん、近所づきあいなども無論ない。昨年の大地震の時は周りを見渡しても知らない人ばかりだったので一瞬焦ったものの、普通に日常生活を送る上では、近所づきあいがいいことで、困ったことは今まで一回もない。近所づきあいどころか、周りに対してのガードは逆にとても堅くなっている。

プライバシーに対しては以前より敏感になっていて、アポなしのチャイムがなると“ピクッ”となる。まずドアを開けたことはない。昨年の国勢調査の調査員は相当苦労したということを知ったが、それも納得できる。たまに、マンション居住者専用の共同ランドリーで、住人と一緒になることがあるが、毎度ながらどうも気まずくて居心地が悪い。

おそらく今あるマンションのほとんどが、居住者のコミュニティや暮らしに重点をおいたものではなく、住まい方のニーズとは無関係に一方的に供給されているため、住む人にとってもコミュニティが無いことが当たり前となっている。確かに、近所づきあいがいい方が楽だから、といってマンションに住んでいる人はいるとは思いますが、マンションにも居住者のコミュニティに重点をおいたものがあっていいと思う。

マンション住民同士が顔見知りだったり、子育ての面でも同じ世代の仲間や相談できる経験豊か

な年配の方と顔見知りだったり、近所付き合いがあった方が暮らしやすくなるだろう。例えば、広めの共用スペースがあり、旬の食材とか、お話を持ち寄ってちょっとしたパーティができるものだったり...、また、生活の知恵袋的じいさんと世話好きばあさんが、いろいろとお世話をしてくれるマンションなど、暮らし方に応じて幾通りも想像できる。

マンション毎に共通の住まい方コンセプトがあって、それに賛同する人が集まり居住者の間で付き合いが始まれば、今よりは人を身近に感じれる暮らしができるのではないだろうか。マンションに根付いたコミュニティが地域にはみ出して交流が生まれ、地縁ができ、まちが元気になるとしたら一石二鳥だと思う。テーマのある暮らし、そんな住まいづくりと係わっていきたい。

（ゆきまる ひさのり）

表紙説明
地域計画のための一知半解事典

どうしてBB世代の持家世帯は
増加している？

本田 正明

「福岡県内のBB（ベビーブーム）世代は、ここ10年間で人口はほとんど変化していないのに、どうして持家世帯が4万世帯近くも増えているのだろうか？」

人口ボリュームが大きい世代なので、ファミリー層の低廉なマンションの購入が拡大したのか、単身のマンション購入が増えているのか、はたまた離婚による世帯増加なのか、など所内でも議論になりました。

ファミリーから1人暮らし2人暮らしが増加へ

まず、表紙で用いたデータの内訳から見てみます。BB世代では、持家世帯が36千世帯増えたのに対し、借家等では14千世帯ほどしか減っていません。人口は10年間でほとんど変化していないので、借家から持家への世帯移動だけではなく、世帯分離なども考えられそうです。

増減の多い持家世帯の中身をもうちょっと詳しく見てみると、BB世代では典型的な核家族である“夫婦と子供”の世帯よりも“一人暮らし”や“夫婦だけ”の世帯が増えていることがわかり

	1990 (40～44歳)	2000 (50～54歳)	2000-1990
人口	412,111	409,892	2,219
総世帯数	198,728	219,209	20,481
持家	106,890	142,697	35,807
公営の借家	17,379	15,994	1,385
公団・公社の借家	8,555	6,936	1,619
民営の借家	50,903	43,943	6,960
給与住宅	13,658	9,518	4,140

間借りを除いているため総数と内訳の合計が不一致
給与住宅とは社宅などのこと

	1990 (40～44歳)	2000 (50～54歳)	2000-1990	
持家	一人暮らし	3,581	10,754	7,173
	夫婦だけ	3,508	16,510	13,002
	女親と子供	7,239	12,462	5,223
	夫婦と子供	63,304	69,433	6,129
民営の借家	一人暮らし	11,601	16,841	5,240
	夫婦だけ	3,559	5,163	1,604
	女親と子供	7,518	6,004	1,514
	夫婦と子供	24,838	12,385	12,453

増減の多い世帯を選んでいる

	1990 (35～39歳)	2000 (45～49歳)	2000-1990	
持家	一人暮らし	2,343	6,829	4,486
	夫婦だけ	2,633	6,849	4,216
	女親と子供	3,582	10,292	6,710
	夫婦と子供	39,358	61,820	22,462
民営の借家	一人暮らし	12,339	14,945	2,606
	夫婦だけ	4,529	3,529	1,000
	女親と子供	5,282	6,443	1,161
	夫婦と子供	27,559	15,210	12,349

増減の多い世帯を選んでいる

まず、民営の借家世帯の中身を見ると、“夫婦と子供”の世帯が12千世帯も減り、一人暮らしは逆に5千世帯も増えています。BB世代よりも5歳若い世代では、借家の“夫婦と子供”世帯が持家へ単純に移行しているのが読み取れるのに対し、BB世代では、子供の大学進学や就職などの影響で、“夫婦と子供”の世帯から夫婦だけの二人暮らしへ移行が増えているようです。

一人暮らしの増加原因については、本当に単身のマンション購入が増えているのか、親との死別・離別によるものなのかなど、借家の一人暮らしの増加原因とも合わせて、不動産の状況などを実際に聞いてみる必要があります。

離婚による世帯増もかなりある？

念のために、福岡県の離婚件数を人口動態調査で調べてみると、1990年から2000年までの10年

間で約10万件あります。2000年のBB世代の離婚者数は全体の6%ほどなので、10年間でみると6千件ぐらいはありそうです。BB世代の“女親と子供”の世帯が5千世帯増えているのと考えて考えると、離婚による世帯増もかなりあるのかもしれませんが。

実際の動きをつかめれば、次回また報告したいと思います。気づいたことや反論、事例などがありましたら、ご連絡ください。

(ほんだ まさあき)

所 員 近 況

パソコン再生奮闘記

5年前に購入したパソコンが古くなったので、使える部品を残して、新たにパソコンを自作した。最初はコストを最小限に押さえようと、3万円ぐらいの予算を組んだのだが、周辺機器の選択肢を決定する肝心要の部品をろくに下調べもせずに、買ってしまったために、「あれ？画面が写らない」、「どうやらサウンドカードとイーサネットカードはいらぬみたい」などなど、想定外の事態が後から後から発生し、気がついたら7万円近く費用がかかるとともに、パソコンが2台になっていた。

そのことを、なじみの飲食店で話すと、「余ったパソコンぜひ譲って！」と言われたので、私も廃品回収に出すくらいなら、その方がいいかなと簡単に「いいよ」と言ったのだが、それからが大変な日々の始まりだった。

古いパソコンは、部品を取り出すために、きれいに分解していたので、それを組み立てて電源を入れさえすれば、立ち上がるだろうと軽く考えていたのだが、そうは問屋が卸さない。一回分解するとセッティングが変わるようで、ウンともすんとも言ってくれない。パソコンを販売していた外資系企業は、数年前に日本から撤退してしまっているのだから、サポートも受けられない。思わぬ形で外資系の怖さを味わう羽目になった。

いろんなパソコンサイトで情報を集めて、なんとかインストールのブルーの画面にたどりついたのだが、途中で止まって動かなくなった。原因はどうやらマザーボードの電池切れらしい。入れ換えて動いたかと思うと、またすぐに動かなくなる。

さすがに諦めようかとも思ったが、1週間ぐらいして、コンデンサーの液漏れという原因を突き止めて歓喜する。しかし、その肝心なコンデンサーが福岡の電気屋を10件ぐらい回っても見つからない。パソコンのことはネットが一番情報があるはずと思い調べていくと、なんとマニアックなパーツ専門店を天神に発見する。電話で確認し、なんとかパーツを見つけることができた。

慣れない手つきでハンダごてを使いコンデンサーを装着。今度こそ動くだろうと、気合いを入れて電源スイッチを押したのだが、それでもまだまだ動いてくれない。さすがにへこみそうになるが、ここまでの努力をムダにしたくないので、こっちも意地になる。

何度もいじっているうちに、どうやらハードディスクが壊れてしまったようだ。問題がハード

ディスクでない場合も想定して、中古のパーツショップで安いハードディスクを購入して、再度チャレンジ！……でも動いてくれなかった。

ここまでくるのに既に1ヶ月以上かかってしまっているのだが、お店の人には「いつでもいいから気にしないで」と逆に気を遣われる始末。

1ヶ月間、コンサルタント能力をフルに使って情報を集めていたので、この時点での選択肢は3つほど考えられた。まずは一番無難なところから攻めようと、ハードディスクとマザーボードの中間部品を一つ抜いて起動してみる。なんとwindowsのロゴが出ているではありませんか。約1ヶ月ぶりのカラー画面である。

難解なゲームを解いたような爽やかな達成感がこみ上げてきたのだが、ふと時計を見ると月曜の朝3時になっていた。 (本田 正明)

第14回よかネットパーティーのご案内

人と人の交流の場、「よかネットパーティー」を開催します。いい話、おすすめの食べ物を持ち寄る参加型パーティーです。皆様のご参加をお待ちしております。

日時:平成18年5月13日(土)
13:00～15:30

場所:警固神社境内 中央棟

- ・「おすすめの品」は調理済みのものをお願いします。
- ・本パーティーではできるだけごみを出さないよう、例年有田焼お皿を窯元に注文しています。「ごみ軽減協力費」として、1,000円のご負担をお願いします。

---編集後記---

今号は4つも記事を書き、なおかつ編集も担当したので、目のまわるような思いをした。この時期は業務のスケジュールがタイトなので、みんなピリピリムードで、原稿のお願いもスムーズにいきません。結果として自分の記事が増えたのですが、マネージャーの力量不足を実感しました。(ほ)

パソコンを自力で治すなど考えられない私は年末に故障(コンセントが抜けかけてただけ)した時、パソコンの自然治癒力を信じ3週間放置するしか出来ませんでした。なので本田には感心します。(さ)

よかネット No.80 2006.3

(編集・発行)

株よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

株地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132
大阪事務所	TEL 06-6942-5732
東京事務所	TEL 042-501-2531
名古屋事務所	TEL 052-202-1411
株地域計画・名古屋	